

日本産業衛生学会九州地方会ニュース

産衛九州

発行所 日本産業衛生学会九州地方会
〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
産業医科大学産業生態科学研究所
労働衛生工学研究室
TEL (093) 691-7459
FAX (093) 602-1782
発行責任者：地方会長 田中 勇武

(題字 倉恒匡徳筆)

労働衛生コンサルタント受験奮闘記

学会理事 竹本 泰一郎

(長崎国際大学健康管理学部)

今年の春に労働衛生コンサルタントになりました。一昨年からトライですので足掛け3年もかかった大事業です。4年前に国立大学を定年退官し私立大学に移った時、これで少しは暇になるだろうという錯覚に陥りました。これが全くの間違いだったことは直ぐにわかりましたが、当時は手もち無沙汰になることを恐れました。高齢者は趣味・生きがいをもって高いQOLを維持しましょうか、PPKということ、永年学生や世間様云って来ましたが、自分自身のことになるとさっぱりです。

ゴルフは20年も前にあきらめましたし、自動車に乗るのも好きなのですが、愛車もあっちこっちぶつけ切られの与三郎号と自嘲しているようではA級ライセンスや2種免許は無理だろうと考えました。ちなみに私はイギリス免許ですので、イギリスでは大型車もトレーラーも、ひょっとすると戦車も運転出来ます。仕方がないのでコンサルタントでも取ってみようかということになりました。

25年も公衆衛生の教授をしていれば、お茶の子さいさいだと自他ともに思い、何の準備もなしに久留米に行きました。もともと、以前受験して落ちた心臓血管外科の名誉教授がまともな勉強はするな、労働衛生のしおりがいいというお話でしたので特急の中でパラパラとめくっていききました。受験場では前の席に教え子で旧教室員がいたりしたのはやや焦りましたし、設問はさっぱり判りませんでした。落ちたのですから問題の批判はいたしません。40年前に千葉の運転免許場で法規で落ちたぐらいのショックでした。ただ厚労省の担当部局の事務処理の悠長なものには驚きまし

た。出願—確認—再提出—受験票の送付—不合格通知等々が数ヶ月かかりました。合格時のいざこざ—合格証書の何かが間違っていたので送り返せということですが、改めて送り返されてきた証書のどこが前のものと違うのかさっぱり判りません。かつて自分も属していた日本の官僚主義の非効率を痛感しました。対応が迅速なのは税務署だけです。

もう止めたやめたと思っていたら、県医師会から日本医師会講習会の割当てに先生の分を取ってると言われ、しぶしぶ講習会に行きました。非常に有益なお話を伺いました。やはり若い先生方の講義はご年配の先生より面白く、改めて老兵のでる幕ではないと自戒した次第です。面接は旧知の某大学名誉教授が主面接者で法令と環境でのトンチンカンな答えを繕ってくれたとみえ合格しました。早速、竹本労働衛生コンサルタント事務所というのを家の玄関にかけようかと思いましたが、家族の皆にうさんくさいと反対され、看板もかけず事務所開きのパーティーもまだしていません。当然、依頼も1件たりともありませんし、コンサルタントになったことによる収入は全くありません。2回の受験費用、講習会への旅費・宿泊費、登録費といった出費も馬鹿にならない上に、産衛の学会費より高いコンサルタント会に入れと言ってきています。最近の旧国立大学にならって何か事業を興すか、この4月から理事長を兼務している病院の健診部門を活用して地域医療と産業保健の連携に役立たないかなどと思案していますが、途遠しです。どなたか良い知恵をお貸し下さい。

受賞のことば

学会賞を受賞して

田中 勇 武

(産業医科大学 産業生態科学研究所 労働衛生工学)



最初に、第42回日本産業衛生学会(2005年4月)での学会賞受賞講演内容を簡単に紹介します。

学会場(東京プリンスホテル 鳳凰の間)に突然音楽が流れる。"風の中のスパル 砂の中の銀河 みんな何処へ行った 見送

られることもなく……" 中島みゆきが歌う「地上の星」である。そして静かにナレーションが始まる。

「この物語は、粒子状物質の吸入曝露実験システムの構築に携わった男の物語である。」このようにして学会賞の受賞講演はスタートした。

まず、粉じんがどのように生体へ取り込まれ、健康影響を及ぼすのかについて、特に粉じんの大きさに着目しながら一般的な解説から始めた。

およそ10ミクロン以上は、呼吸器官上部で捕捉され、それより細かな粒子が肺深部まで侵入する可能性があり健康影響を考えると、10ミクロン以下の粉じんを取り扱うことになる。ところが、粉じんが、ここまで細かくなると厄介な性質が出てくる。100とか200ミクロン程度の粒子であれば、例えば海岸の砂であれば、さらさらと流動するが、10ミクロン程度より小さくなると粒子同士、付着凝集して、スムーズな流れができにくくなる。

粉じんの吸入曝露による健康影響を研究するための必須の曝露条件は

1. 粉じん濃度が曝露期間中一定であること
2. 粒径分布が曝露期間中変化しないこと
3. 化学組成が曝露期間中変わらないこと

このうち2と3はある程度まとまったテスト試料が確保できれば解決できる。

最も難しいのが、曝露期間、最長で2年間、粉じん濃度を一定に保って実験動物に吸入させることができるかどうかにかかっている。

砂などは、砂時計としても利用され、一定の量を曝露チャンパーに新鮮空気とともに供給してやれば、吸入曝露実験になんら支障はない。しかし、健康に関係する細かな粉じんは、さらさらと流れないため、この粉じんをどのようにして、一定の量で長時間安定して、供給することができるか解決しなければならない。

色々な試作過程を経て開発されたのが、連続式2成分系流動層である。

紆余曲折はあったが、粒子状物質については、吸入曝露実験に堪え得る性能を具備した発生装置が完成した。さらに繊維状物質の吸入曝露についても、一工夫加えることで

発生が可能になった。

この開発された発生装置を用いて、吸入曝露実験システムが構築され、吸入曝露による健康影響について研究された粉じんと繊維を紹介すると、

粉じんについては、石炭飛灰、ニッケル化合物、粉状農薬、木粉、石灰石、結晶質シリカ、感受性粒子、タバコ副流煙等で、

繊維状物質については、ガラス繊維、セラミック繊維、硫酸マグネシウムウイスカ、チタン酸カリウムウイスカ、グラファイトウイスカ、シリコンカーバイドウイスカ等である。

低く、静かにエンディングテーマがバックに流れ始める。"行く先を照らすのは…… ヘッドライト・テールライト旅はまだ終わらない" スクリーンには、研究成果の一覧がスクロールされる中、「これらの研究成果により、思いもかけず、学会賞という荣誉ある賞をいただき、感謝いたします。しかしこれは声を大にして申し上げておかなければなりません、これらの研究には、多数の研究者に参加いただき、その英知を結集した結果です。この方々とともに、喜びを分かち合いたいと思います。」という結びを述べ、受賞講演を終えた。

今、新規の粒子状・繊維状物質の開発が増加しています。それも機能性を持たせるために、より微小で極細の方向に向かっています。これらのエアロゾルは、有用な化学物質であり続けるでしょうが、健康への影響も無視できなくなると考えます。今の段階において、有用な面だけでなく、その有害性についても検討を開始しておくことが重要であると思います。石綿は、優れた化学材料だからと有用な面だけが喧伝され、小さな声だった有害性について、甘い詰めをしたため、20~30年後に重篤な健康障害を発症させる結果となりました。同じ轍を踏まないためにも、有用性はもちろんですが、有害性についても同時に検討することが、当たり前になる世の中になるように望んでいます。

今後とも、粉じんや繊維状物質の健康影響、特に吸入曝露における健康影響について、微力ながら携わっていかうと考えていますので、ご支援ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

また、九州地方会発展のためにも全力を尽す所存ですので、宜しくお願い申し上げます。



研究紹介・学会報告

カソリック大学との定期交流会

戸津崎 貴文、森本 泰夫、東 敏昭

(産業医科大学 産業生態科学研究所)

去る1月20日、本大学とカソリック大学との産業保健の定期交流会が開催されました。この交流会は、カソリック大学産業保健大学院(2005年から公衆衛生大学院に改名)と産業生態科学研究所との間で相互に行われおり、前回は当大学が韓国に訪問し、今年はカソリック大学が来学しました。従来は、相互に20人前後の訪問でしたが、今年は韓国から31名(教員5名、学生26名)の参加。本学からも研究所、実務研修センターの教員、産業保健研修コース、産業医修練コース1から参加があり、総勢60名を越す最大規模の交流会となりました。

沿革

カソリック大学は、韓国において最も産業医学に貢献してきた大学で、国内外に多くの産業医学の重鎮を輩出しています。韓日中産業保健学術集談会(日本代表 大久保産業医科大学前学長、事務局:東教授)にも、多くの同大学関係者が世話人として活躍しており、産業保健の様々な分野で当大学のカウンターパートとなっています。

本交流会は、卒後修練コースの国際交流の第一歩として、産業医学を志し修練を行う同胞が、まずは親睦を深めること、及び産業医学に係わる新たな共同研究の礎になることを目的とし、ともに産業保健分野のWHO協力センターである本学研究所とカソリック大学公衆衛生大学院との間で平成12年から当交流プログラムが開始され、今年で5年目となります。

産業医科大学の見学

大和助教授(労働衛生工学)と修練医が、研究所、センター、病棟の案内を行いました。海外の同じ目的の研究施設の見学とあって、活発な質問が飛び交い、1時間が、瞬く間に過ぎました。

公式プログラム

本学、東敏昭所長より、開会及び歓迎の挨拶、カソリッ

ク大学公衆衛生大学院長の Park 教授より、御礼の挨拶がありました。その後、東所長より研究所の設立の経緯、3部門の国内外の活動、産業保健修練コースの状況、遠隔教育を含めた国際集団コース状況、当大学で毎年開催されている産業医学の国際シンポジウムなどの研究所やセンターのアクティビティが紹介されました。カソリック大学公衆衛生大学院副学部長である Kim 教授よりカソリック大学のキャンパスや公衆衛生大学院の紹介、カソリック医学センターの組織、韓国における産業保健の実情について報告されました。



今年の新たな試みとして、両国における産業保健の話題やトピックの紹介を行いました。日本側から産業保健管理学の堀江教授が、日本における産業医、産業保健活動の現状として、日本の法律と産業保健の関係を中心に講演しました。労働安全衛生法における産業保健スタッフの役割と違反した場合の刑罰、裁判事例を例に挙げ、民法上における過労死の捉え方や状況を説明しました。また、韓国側からは、Koo 教授がカソリック産業医学センターの組織、同組織が我々と同様に産業保健のWHO協力センターと承認されていること、国、機関、海外の研究所との共同研究、引率教員の研究紹介を行いました。これらの講演を通して、修練医は、海外の産業保健レベルを肌で実感できますし、また、教員もどのような共同研究が可能か、幅広く可能性を検討できます。以前の進行状況を踏まえ、時間に余裕をもたせプログラムを作成したところ、予想に反して順調に進行し、最後に大久保前学長に少し長めのスピーチをお願いしたところ、臨機応変に対応していただきました。

交流会終了後、これも恒例の懇親会が、若松の伊藤屋にて、和食と日本の漁港風景を堪能して頂きながら開催されました。懇親会には大久保前学長にも御参加頂き、再び、

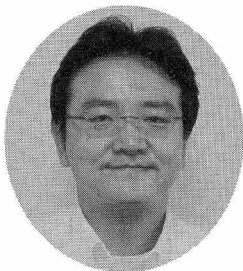
活発な意見交換が行われました。自己紹介の時間では、英語、日本語、韓国語の混ざった自己紹介が行われ、カソリック大学の大学院生の中には、日本語を勉強して来日した方もあり、堪能な日本語による自己紹介が行われました。大盛況の伊藤屋での懇親会の後、こちらも恒例の「カラオケ」交流会が学園大通りコロッセ俱樂部にて開催されました。韓国の歌で、歌詞もハングルでよく分かりませんが、何となく通じるのがカラオケ。歌詞が分からなくてもお互いとも盛り上がり、韓国と日本の文化的交流を行うことが出来ました。

今秋は、カソリック大学に訪問する事となりますが、文化的な交流と学術的な交流を進めることが出来るように、こちらも日々勉強しなければ、と思っています。ご興味のある方は、次回の交流会（11月17日～19日）に御参加頂けたらと思っています。

中韓日学術集談会ポスター賞 を受賞して

竇珠山 務

(産業医科大学 産業生態科学研究所 環境疫学)



この度、標記の学会（2005年6月2～4日、中国・大連市）で栄えあるポスター賞をいただいた。約100演題中の最優秀ポスター3題のうちの1つに選んでいただき、嬉しさを感じる半面、実はどこことなく気恥ずかしくもあった。と言うのも、演題申し込みの際、締切り日を過ぎており、事務局長の東先生のご厚意で許していただいた経緯があったからである（抄録集には演題名こそあるが、私の抄録は掲載されていない）。そのため、ポスター作成に当たっては明瞭で印象的なものを心掛けたのはもちろんのこと、抄録300部を持ち込んで当日積極的に配布するとともに、質疑応答時間では興味関心のありそうな人に片っ端から声を掛けて討論に引きずり込んだ。審査員の先生にこうした姿勢を評価していただいたのかも知れないが、その裏には以上のような事情があったのである。また、例年のポスター賞

が日中韓3カ国から1名ずつ選ばれていたのだが、今回は異例の日本人ダブル受賞（もう1人は永野千景先生）となった。私の演題（演題名「中国製鉄労働者のコホート研究：15要因曝露の死亡リスクの評価」）が中国との共同研究であったこともあるが、中国人研究者を差し置いて受賞してしまったようで何となく申し訳なくもあった。いずれにせよ、受賞させていただいたことに代わりなく、今後もより一層精進致す所存である。

さて、今年の春から俄かに、中国では反日デモが各地で起こっていたが、学会場およびその周辺では特に目立ったものはなく、私たち日本人参加者は皆胸をなで下ろした次第であった。テレビ等で大規模かつ荒々しい日本バッシングが報道されていたため、一応は用心していたが、結局取り越し苦労であった。ただ（それとは関係ないだろうが）、1つ残念だったのは、演題ポスターを日本に持ち帰れなかったことである。日本国内の学会では「ポスターの撤去は夕方までに」というのが多く、私も含めて日本人参加者の多くは無意識のうちにそう思っていたのだが、実際はそうではなかった。「ポスター撤去が始まっていて、中には破かれた人もいる。」2日目午後のコーヒープレイク中に誰かが言い出し、皆で急いでポスター会場に行ってみた。展示用パネルはほぼ全て片付けられ、ポスターは無造作に剥がされ、ほとんどは無残に破かれていた。幸か不幸か私のポスターは見当たらず、残骸の中にもそれらしきものはない。一緒に置いておいた運搬用ケースもなかったため、会場隣の男性に尋ねると「たぶんこっちにある」とのこと。後に付いていくと、屋外駐車場で係員がポスター用パネルをトラックに積み入れていた。私のケースをトラックの荷台に発見し、丁寧に礼を言って返してもらった。ポスターは見当たらず終いであった。会場に戻ると、日本人参加者の多くが悔しそうな表情をしていた。最も近い間柄の3カ国での開催とは言え、今回の学会が国際学会であることを痛感させられた。「日本の常識は世界の非常識」とはよく言われるが、今回のポスター撤去騒動を教訓として心に刻んでおきたいと思った。

最後になりましたが、ご指導いただいた環境疫学の高橋謙教授、学会事務局長の東敏昭教授、日本側代表の久保利晃先生に紙面をお借りして深く感謝申し上げます。

中韓日産業保健学術集談会ポスター賞 受賞にあたって

永野千景

(産業医科大学 産業生態科学研究所 産業保健管理学)



今回、私は平成17年6月2～4日に中国・大連にて開催されました中韓日産業学術集談会に初めて参加させていただきました。海外渡航も学生時代以来であり、福岡空港のターミナルが国内線と国際線に分かれたのも知らなかった私は事前の抗日デモの報道にびくつき

つつ、何とも怪しいポスターを入れた大きな筒を担いで日本を後にしたのでした。

中国に降り立った私を迎えたのは数々の高層ビル群でした。中国といえばNHKのシルクロード、人形劇三国志、中国雑技団といった貧困なイメージしか持っていなかった私はその近代的な風景に圧倒されてしまいました。大連は遼東半島南端にある中国の重要な港を備えた工業・観光都市ですが、市街地は清潔で環境もよく、往来する人々は大きな道路でも躊躇することなく斜め横断で街を闊歩しており、まさに中国の経済成長の勢いを感じさせられる光景でした。

いざポスター発表の日は朝からポスターを掲示しに会場に臨みましたが、日本からの出席者の方々はもちろん、中国人スタッフの方や同じく韓国からの発表者の方までも、言葉は通じないながら、ポスターを掲示するのを快く手伝ってくださり非常に感激しました。

質疑応答時間では逃げ腰になりつつも八幡先生はじめ日本からの出席者の先生方に叱咤激励され、ブローケン英語で乗り切りました。私の発表演題は「Overwork and commuting time affect workers' sleeping hours - development of action checklist for sleeping-」であり、某日本企業において時間外労働時間や通勤時間が増えるほど睡眠時間が短くなったという調査結果を示したものでしたが、「私の国では肉体労働者が多いが肉体労働では長時間働くほど良く眠れるのではないか」「地方都市では通勤時間が1時間以上となることはあまりないのではないか」といった非常に参考になる鋭い質問、ご意見をいただ

きました。発表内容に関連して自由配布していた「睡眠についてのアクションチェックリスト」の英訳版がふと気づくと全部なくなっており、今年流行のショッキングピンクを基調にあらゆる色を用いた派手なポスターにしたのがよかったのか、多数の方が私のポスターを覗いてくださっただろうことが推察され、発表者冥利につきました。

今回、思いもよらず私のような若輩の者がポスター賞をいただき、何が起こったかよくわからないほどうれしかったのを覚えています。本当に東敏昭先生をはじめ、産業医科大学産業生態科学研究所の諸先生方のご指導の賜物だと思っております。受賞を知らされてから「受賞スピーチを考えておかないと！」という周囲の声に、半分冗談だろうと思いながらホテルの便箋の切れ端にスピーチの文章を拙い英語でつづり、同じくポスター賞を受賞された寶珠山務先生とバスの中で一生懸命スピーチの練習をしながら懇親会会場に臨みました。結局、表彰式はスピーチ無しの段取りだったのですが、スピーチの練習をしていたことを聞きつけた東先生がわざわざ時間を作ってくださり、これまたブローケン英語でスピーチさせていただき、本当に忘れられない学会になりました。

帰国後も電子メールを通じて国内外の方々から発表内容についての質問やご意見をいただくことができ、福岡空港の国際線ターミナルに行くのにもびくついてた私ですが、今回の学会で本当に貴重な人間関係、経験を得ることができました。最後となりましたが、本学会において中国、韓国、日本のスタッフおよび参加者の諸先生方に大変お世話になりました。この場を借りて心より厚く御礼申し上げます。



日本産業衛生学会 九州地方会を開催して

平成17年度九州地方会学会会長 田中 勇武
(産業医科大学 産業生態科学研究所 労働衛生工学)

平成17年度日本産業衛生学会九州地方会学会を6月17日(金)、18日(土)の日程で、ウェル戸畑において開催いたしました。

昨年の宮崎で開催された地方会学会とほぼ同様の21演題の申し込みを頂きました。参加者は合計180名でした。

前回同様、分野によって会場を分けずに、一会場での発表としたことで、専門としている分野以外の発表を聴く機会となり、普段の活動では得られない情報が得られたことと思います。

一般口演では、解剖学実習におけるホルムアルデヒド曝露を根本から解決しうる解剖台の開発、自家用車の運転の際に受ける窒素酸化物濃度の評価、独立行政法人となった旧国立大学における労働衛生活動の問題点、禁煙した年数が長くなれば医療費が低減するという分析結果、過重労働に関する話題、看護職におけるストレス調査結果など幅広い分野にわたり意欲的な発表がおこなわれ、活発な討論がおこなわれました。

教育講演では、産業医科大学の大和浩助教授の「職域における喫煙対策」では、煙の漏れない喫煙室の作成もしくは屋内を禁煙化する受動喫煙対策の徹底と産業保健スタッフの禁煙サポートを同時に進行することで、2年間で約10%の喫煙率を低下させる喫煙対策プログラムについて講演いただき、つづいて、広島文京女子大学福祉工学の宇土博教授より、「職場の筋骨格系障害の予防-人間工学的対策の進め方-」について、職業性疾病として最も頻度の高い腰痛について、腰部に負担をかけないための姿勢や作業方法の改善、重量物取り扱いの際のバランスャーや腰ベルトなどの補助具、VDT作業の改善事例について具体的な写真を用いた改善事例の紹介がありました。特に、医療関係では介護作業に腰部保護ベルトを用いることで腰痛予防がおこなわれている事例について分かりやすい説明があり、参加者も熱心にメモをとっていました。最後に、「職場におけるメンタルヘルスの具体的な進め方」と題して、社会問題となっているメンタルヘルス対策について、産業医科大学の永田頌史教授から、事業場でとりくむべき4つのケア、ストレスマネジメントのためのツール(質問紙、教育プログラム)の開発、そして、実際に事業場で応用して

メンタルヘルス不全者の数が減った介入研究の結果、一般向けのパンフレットの開発についての解説がありました。さらに、産業医科大学高度研究の一環として現在進行中の、メンタルヘルス改善のための多施設介入研究についても紹介されました。

最後に、本学会開催に際してご協力をいただきました関係各位に、この場をお借りし心からお礼を申し上げます。

編集委員報告

国立大学法人鹿児島大学という 事業場における産業保健

青山 公治

(鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科環境医学)

昨年2004年4月から国立大学は国立大学法人としてスタートし、一般の事業場と同じ労働安全衛生法(安衛法)が適用されることになった。スタート前から学内の新たな規則の整備や有資格者の確保など慌ただしかったようだ。衛生管理者の資格を取得するための試験対策講習会には何回か駆り出された。

鹿児島大学職員労働安全衛生管理規則にもとづき、桜ヶ丘地区(医歯学総合研究科キャンパス)衛生委員会が設置され、私も委員として参加している。駆け出しの委員会でも十分に機能しているとは言えないが、そこでは、これまで職場巡視報告や定期健康診断、特殊健康診断などの実施計画、禁煙対策について議題が挙げられてきた。

一方、我々はこれまで学部学生に対し「衛生学」の授業を担当し、産業医学(保健)領域について、講義・実習や事業場見学などを通して産業保健の重要性を学生に強調してきた。自分が労働者として産業保健管理下にあることはすっかり忘れて、「大学では安全衛生管理はどのように行われているのか」と、もし学生から問われたら私はどう答えていただろう。「人事院規則に基づいている」としか答えられなかったであろう。実際には、安衛法と対応した人事院規則により安全衛生管理体制は整備されていたことを私は知らなかった(しかし、安衛法と違うところは、罰則規定がないとのこと。これは大きな違いである)。

衛生委員会に参加し思うことが二つある。ひとつは、「言うは易く行うは難し」である。昨年度はカリキュラムの移行期で我々の学部授業はなかったが、今年度から法人

化後の初めての授業がこの秋に始まる。さて、どんな顔して講義をしたものだろう。

もうひとつは、国立大学法人事業場の中での学生の位置付けである。学生は職員ではむろんない。学生はお客様？事務担当者に聞いてみた。学生は労働安全衛生管理の対象外で、何かあった場合は、「学生教育研究災害障害保険」があると。しかし、未然防止という観点からは、職員も学生もおかれている環境は同じであるから、同等に扱われるべき、との回答であった。したがって、有機溶剤、特定化学物質を扱う場合は、教員・学生とも特殊健康診断等も受診の対象とするとのこと。適切な判断と納得したが、果たして未然防止の立場から、それで十分であろうか。

企業の研究所の方々と共同研究をしているが、研究打ち合わせのときによく耳にすることがある。休日の実験は極力避けたい、と。その理由は、もし休日に実験室で一人で倒れられでもしたら責任問題で大事になるからと。大学では、職員・学生が休日に研究室内で実験をすることなど日常茶飯事のことであり、実態はそのような安全管理にはあまり気を遣ってこなかったように思う。考えてみれば休日に観覧車をお客様（学生）自身が稼働し乗っているようなもの、もしも何か起これば確かに恐ろしいことである。

大学としては、職員の意識の転換と、学生への授業の中に研究室の安全衛生に関するカリキュラムを必修科目として導入する必要があるのではないかと。また、職業人として人材を世の中に送り出す大学の責任は重いと思う。そのためにも、事業場としての大学は、安衛法の遵守にのみとどまらず、お手本となるような産業保健活動を実践していく必要があるように思うのだが。

研究会・研修会その他案内

第15回日本産業衛生学会 産業医・産業看護全国協議会

日 時：2005年10月14日（金）～15日（土）
2005年10月13日（木）
産業医・産業看護・産業衛生技術部会合同セミナー
（ジョイント企画）

会 場：アステールプラザ
〒730-0812 広島県広島市中区加古町4番17号

メインテーマ：産業保健の新たな潮流を求めて
－人間工学の役割と課題－

参加費：日本産業衛生学会学会員
事前参加登録 6,000円
当日参加登録 7,000円
日本産業衛生学会非学会員 8,000円

【懇親会】

日 時：2005年10月14日（金） 場 所：全日空ホテル
会 費：6,000円

【事前参加登録】

受付期間：2005年7月1日（金）9時～9月22日（木）15時

事務局：第15回日本産業衛生学会
産業医・産業看護全国協議会
〒732-0827 広島県広島市南区稲荷町5-11-1002
ウド・エルゴ研究所内
TEL：082-568-7553 FAX：082-264-1253
<http://www.udoergo.jp/ncopn.html>

九州地方会理事会報告

平成17年度第1回理事会が、平成17年6月17日（金）ウェル戸畑にて開催された。主な議題は、

1. 平成16年度第2回議事録要旨（案）の確認
2. 平成16年度事業報告及び決算報告
3. 平成17年度事業計画及び予算（案）
4. 平成18年度地方会学会の開催について
5. 名誉会員・功労賞候補者の推薦について
6. 地方会各理事分掌事項について

であった。

平成17年度の主な事業計画としては、

1. 地方会学会の開催
2. 研究会等の開催
 - ①労働者の生涯健康の支援を考える会
 - ②「失業と健康」研究会
 - ③第20回健康管理研究会
 - ④第39回中小企業安全衛生研究会全国集会
 - ⑤産業看護研究会
 - ⑥第105回九州医師会医学会第8回分科会・産業医学
会（第5回）
3. 産衛九州地方会産業看護講座・実力アップコースの開催
4. 地方会ニュース「産衛九州」第18・19号の発行が挙げられ、承認された。

平成17-18年度 九州地方会役員・代議員

(五十音順)

編 集 後 記

地方会長

○ 田中 勇武

理 事

- 青柳 潔
- 石竹 達也
- 大久保 利晃
- 川本 俊弘
- 田中 勇武
- 東 敏昭
- 藤代 一也
- 山城 愛子
- 伊規須 英輝
- 上田 厚
- 加藤 貴彦
- 竹内 亨
- 友国 勝麿
- 福満 ミチ子
- 三角 順一

監 事

竹本 泰一郎 二塚 信

幹 事

永野 惠 大和 浩

○印：本部理事



代議員

- 青木 一雄
- 青柳 潔
- 嵐谷 奎一
- 池田 正春
- 石原 逸子
- 上田 厚
- 大久保 利晃
- 加藤 貴彦
- 川本 俊弘
- 神代 雅晴
- 小山 一郎
- 小山 和作
- 佐土原 浩子
- Jahng Doosub James
- 高木 勝
- 滝川 恵子
- 竹本 泰一郎
- 田中 雅人
- 友国 勝麿
- 永田 頌史
- 成松 勇人
- 西田 和子
- 服部 泰
- 東 敏昭
- 福光 ミチ子
- 二塚 信
- 保利 一
- 堀川 淳子
- 三島 徳雄
- 溝上 哲也
- 三宅 晋司
- 森 晃爾
- 森本 泰夫
- 大和 浩
- 青野 裕士
- 青山 公治
- 伊規須 英輝
- 石竹 達也
- 市場 正良
- 内田 和彦
- 織田 進
- 河村 裕
- 樺田 尚樹
- 小宮 康裕
- 小山 倫浩
- 近藤 充輔
- 柴戸 美奈
- 住徳 松子
- 高橋 謙
- 竹内 亨
- 田中 勇武
- 筒井 保博
- 内藤 正子
- 永野 惠
- 西 雅子
- 八谷 百合子
- 日笠 理恵
- 日野 義之
- 藤代 一也
- 寶珠山 務
- 堀江 正知
- 松田 晋哉
- 三角 順一
- 宮北 隆志
- 本川 真弓
- 森田 哲也
- 山城 愛子

これを書いている時点で、夕刊1面に郵政法案が参院本会議で否決、衆院解散9月に総選挙と取りざたされています。来春を目指していた労働安全衛生法改正案の審議が遅れそうです。また、先日よりアスベストによる健康障害がクローズアップされ、各省庁がその対応に追われています。胸部X線など健康診断項目の見直し検討のニュースも紙面を賑わしました。政治と政策、理想と現実。目の前の波に翻弄されず、目指す航路を進むためには、情報収集のアンテナを高くすることはもちろん、ニュースを咀嚼する力を身に付けなければならないようです。私事ですが、春から夏にかけて子ども会のドッジボールチームの監督を務めた際、地元での情報網がないことを痛感しました。今からアンテナを立てておかなければ、退職後に地域で身動き取れない？とはいえ、日頃は仕事関係や友人との付き合いで手一杯だから生涯現役でいくしかないかと、御歴々のお顔が目には浮かびました。このニュースが出ている頃は、少しは涼くなっているでしょうか。皆様どうぞお体をご自愛ください。(日)

九州地方会ニュース「産衛九州」

発行 平成17年 9月20日

- 編集正責任者：東 敏昭 (産業医科大学)
- 編集副責任者：加藤 貴彦 (宮崎大学)
- 編 集 委 員：青木 一雄 (大分大学)
- 青山 公治 (鹿児島大学)
- 石竹 達也 (久留米大学)
- 市場 正良 (佐賀大学)
- 永田 耕司 (活水女子大学)
- 永野 惠 (熊本大学)
- 日笠 理恵 (福岡県市町村職員共済組合)
- 山城 愛子 (沖縄県産業看護研究会)
- 吉積 宏治 (産業医科大学)

(五十音順)

(編集事務局連絡先)

〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘 1-1
 産業医科大学 産業生態科学研究所
 作業病態学研究室 (担当：砂脇、吉積)
 TEL (093) 691-7471 FAX (093) 601-2667
 E-mail: saneikyushu@pumpkin.med.uoeh-u.ac.jp